
ラブカクテルス その１３

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その13

【Nコード】

N8920C

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は少しエッチな香りのカクテル？をご用意いたしました。
ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は官能メールでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は売れ頃が過ぎた女。

OLをしていたこともあったが、今は飲み屋のホステスさん。

お酒がタダで飲めるし、気楽だし。

気楽？そうでもない。いくらお酒が好きでも愛想を振り撒き、酔っ

払いの相手をしている歳じゃない。本当は。

周りは先に幸せ掴んで逃げていったし、妥協したのが正解？

そうなのかもしれない。

私もこの歳でこんな飲み屋にしがみついているからツキも離れると
言われるし、若い子なんかにはオツボネ様扱い。

やってられない。

私だって昔は男が寄って来たし、からかい半分、本気半分でハレタ
ホレタもあった。でも今は男にもて遊ばれたただだって気付いた。

みんなこの歳になつてみればわかる。

ブランドに溺れ、博打に溺れ、男に溺れ。

お金を貯めてるおりこうさんなんかはほとんどいない。

そんなのは天然記念物。私もそんな風に生きていれば今頃は。

まっ、過去を振り返ってみても何にもならないって。そんなのはわかつちやいるけどなんとやらだ。

それでこの頃の私はというと、人生がこんなになった腹いせに、男たちにある種の罫を仕掛けることに凝っている。

飲み屋に来る、家族もいるだろう、恋人もいるだろう男どもに。

彼らは鴨。私のかわいい鴨ちゃんだ。

私には、今店に行つても指名つてもものがなくなつた。

確かに周りのかわいいキャピキャピの子ほうがいいのだろう。

でも、そんな彼女らの指名が重なったときのヘルプや、忙しいときに来る、初めてのお客の対応など、私はそれなりにあっちこちと忙しかった。

そんな中で、私は必ず名刺を渡す。

一応こつちのアドレスを書いているが、デタラメだ。

そして、こつちにその気があるように見せかけて、相手のアドレスと電話番号を聞き出す。

これで一丁上がり。

私はそれを家に持って帰り、自分のパソコンの中に落とす。

そのファイルがわたしの楽しみも元となる。

電話番号はあまり利用価値がないのである程度はポイだ。

アドレスが肝心なのだ。

私はあるサイトに登録している。それは出会い系サイトである。

かといって、今更そんなところで相手を探そうと言うわけではない。

そのアドレスを使って男どもを誘い、このサイトにアクセスするための利用チケットのポイントを買わせるのだ。もちろん嘘の出会いであるが。

そこでは、私は男を誘うのに色々な女に化ける。それがとても面白く、しかもそうとは知らない男たちが必死になればなるほど、私は快感を覚える。

しかも、男たちが、サイト利用のチケットのポイントを購入するたびに私にもポイントがお金となって換金されて銀行の口座へ振り込まれた。

至れり尽くせりとはこういうことを言うのだらう。男どもは何だかかんた言っても、下心のための出会いしか求めてないし、そんなんで騙されたって同情なんてしやしない。いいキミだ。

そして今夜も新しいアドレスを手に入れた私は、忙しい時間が過ぎたのを見計らって、店を出た。

男は40歳位のどう見ても、妻子持ちのサラリーマン。冴えない感じの万年課長というところか。

男は私がいつものように甘い声で褒め殺し、悩ましい態度で寄り添って、お酒をねだった後にアドレスを聞くと、鼻の下を伸ばして携帯をいじりながら教えてくれた。簡単簡単。

私は早速そのアドレスをパソコンに入れて、サイトに登録した。

さて、この男はどんな女が好みなのか。きっとあんなスケベおやじ、大してこだわりもなく、なんでも食いついてくるだらう。楽勝楽勝。私はいつものように、とりあえず間違いを装ったメールを送り、内容も一人暮らしの寂しさを誰かに訴えるようなものにした。

私はパソコンのエンターキーを軽快に、食いつけっ、と勢いよく叩いた。

きつと明日には、昨日会った時とは違う紳士を演じて私にメールを

送ってくるだろう。

下心ありありで。

私は明け方に近い時間になっているのに気付き、パソコンを閉じた。

しかし、あの男からのメールは一向に来なかったのだった。

私は首を傾げた。

おかしい。普通であれば、何らかの返信が必ずくるはずなんだが。大体多いのは、誰かとお間違いでメールが私に來ていますが、お話の内容から、あなたを放って置けなくなりました。僕で良ければお話相手になります。

といった紳士風の男。そんなのは結構簡単に引つかる。

或いは、架空の相手からのメールなのにそのになりきって返信してくるやつ。

これもイチコロ。でも返信がないなんて、相当な真面目人間か？そんなことはない。飲み屋に來ていたあの男のことだ。真面目な訳がない。

それならきつと、好みのタイプが違うのだろう。

少し時間を空けて違うタイプの女でメールを打つことに作戦をうつした。

私はうつすらとした男の顔を、なんとか思い返した。

その顔にあった女。

そうだ。きつと女子校生みたいな若いんじゃないだろうか。軽い乗りのブルセラ援交辺りで。

私は早速、素敵なおじさま作戦でメールを送った。

今チョー暇してるんだけどおー、偶然送ったこのメールのお相手が素敵なおじさまだったらー、会ってみたいしい。みたいなー。

自分で打っていてイライラする内容だったが、我慢我慢。

喰らい付け。私はエンターキーを打ち放った。

これならどうだ。

しかし、しばらくしても返信はなかった。

私はあまり気にせずに次の女になった。

今度は人妻でいくことにした。

それも退屈な生活を送っている団地妻辺りだ。

いつも家事に追われて平凡な毎日。

刺激が欲しい今日この頃。主人ともご無沙汰。人肌恋しい。

これでどうだつ。喰いつけつ。エンターキーが少し黒ずんで見えた。しかし今回もまた、返信は来なかった。

私は少し考えた。そうだ、きっとあいつの趣味は変態女。それしかない。

私はもう、思い返してもなかなか出て来なくなってきた男の顔を無理くり想像して、イメージを開始した。

どこかのサイトで確か、貴方のコメントを読んだわ。

もし、よかつたらお外とか、車の中とかでチヨメチヨメしない？喰らいつけつ。

エンターキーがいつもより重く感じた。

しかしまたもや返信はなかった。

私は誓った。必ずやあの男を振り向かしてみせると。

それ以来私はなるべく時間を作ってメールにのめり込んだ。店にもあまり行かなくなったし、お酒も口にしなくなった。あの男をとりあえず誘い出すことだけに集中した。

そして、私は色々な女になった。

欲求不満の看護婦。

売れないモデル。海外ばかりに行っていて、たまに帰って来たスチ
ュワーデス。

思いつきり病弱な肌の白い女の子。はたまた短気な女王様。

金髪のグラマー外人。今流行りのコスチューム娘や、メイド。
とてもお金持ちのお嬢様や奥様。

しかし、これだけ毎日送っていても、何一つ返信はなかった。

私は頭を抱えた。そして思いついた。もしかしてあの男はゲイでは
ないのか？

きっとそうだ。

私はもう、冷静さを失っていた。

私はかなり無理がある、男になったメールを送った。

しかし当たり前前如く、返信は来なかった。

パソコンのエンターキーはヘトヘトになっていた。

私は天井をボーッと眺めてた。

そして次の瞬間、想像力の全てを、私の女としての人生に掛けて集
中させたのだった。

後はあの手しかない。かなりの禁じ手だが、そんなことを気にして
いる場合ではなかった。

そしてその禁じ手とは電話番号の記載だった。

今回私は偽名を名乗り、あれこれと女を演じずに一人のキャラクタ
ーとして攻めに出た。

始めは大人っぽく、そして大胆に挨拶を交すようにメールを送り、
当然返信がないと判断すると今度は、

私じゃ駄目ですか？せっかく勇気を出して送ったのに。の半泣きメ
ール。

まだまだ終わらない。これからこれから。

次はいよいよ電話番号を載せて、

これで信用してもらえと思うんだけど。攻撃。

すかさず間を与えずに、

こんな大胆なのは駄目ですか？そして、

次にメールもらえなかったら死んじゃいます。それでも駄目なら、けなしにかかって、

男のくせに意気地無し。この役立たず。

それでも駄目なら…。

いや、先生。さすがにいやらしい話を書かせたら右に出る者はいないですよ。

今回のシリーズは、前の短編の官能小説よりリアルでいいですよ。

その調子で今後とも我がエロエロ出版をお願いいたしますよ。

しかし先生はどうしてこんなに女の人の目線で物語が書けるのか不思議ですね。

いや、この頃エッチな神様からメールが届くのだよ。私にこんな話はいかがってね。いそがしくて飲みに行く暇もないな。

また、先生ったらご冗談を。はははははっ。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8920c/>

ラブカクテルス その13

2010年11月3日02時02分発行